

“さくさく”
さんごうめ
よろしくね♪



【前回までのヒストリー】

札幌国際芸術祭 (以下 SIAF/ サイアフ)2014 をきっかけに「SIAF カフェ」が生まれた。そして 3 年後の SIAF2017 に向けて、引き続き“札幌市資料館”を芸術祭の活動拠点としていくべく、2015 年「SIAF ラウンジ」と「SIAF プロジェクトルーム」が、晴れて館内に設置されたのだった。

SIAF2014 でせっかく生まれた市民の“熱”を絶やさぬよう、芸術祭に関心のあるさまざまな人々が集い、交流し、文化芸術の情報を共有できる場として、2015 年 4 月 28 日「SIAF ラウンジ」はオープンした。SIAF の記録物や関連書籍を閲覧できるインフォメーション機能とともに、休憩や飲食で気軽に利用できるカフェも併設された。そして「こころ」から、SIAF2017 に向けての継続的な活動を行うため、手探りでさまざまなことが試されていったのである。

活動が始まった。SIAF に関心をもってくれる人そのものを増やすことはもちろんだが、まずは「この札幌という場でどんな面白いことができるだろうか?」ということを目指された。こうして始まったのが「SIAF ラボ」である。同年 7 月 4 日・5 日に開催されたパブリック・ミーティングを皮切りに、継続的に「ラボの日」が設けられ、アートについてのレクチャーや、札幌らしさとは何かを考える意見交換会、他の芸術祭の報告会などが行われた。(参加者とともに SIAF ラウンジのメニュー開発をしたり、ラウンジスタッフによる展示・トークなども企画され、開催された)

そもそも「札幌国際芸術祭 (SIAF)」とは、札幌が「創造都市」としてメディアアーツ都市(注)に認定されたことのシンボルイベントとして始まったものだった。都市を巨大な「メディア」としてとらえ、その中で市民が創造的に暮らすにはどうしたら良いかということに対し、積極的に取り組んでいくのが創造都市の理念であり、したがって、SIAF ラボ 1 年目の活動も特に「メディアアート」を軸とした新しいコンテンツの開発に焦点があてられた。ここから、ツララを「メディア」として捉えるとどんなことを見出せるのかを試す「BENTICLE PROJECT - TULALA (愛称ツララボ)」が立ち上げられ、後に、札幌市資料館を舞台とする「さっぽろ垂水(たるひ)まつり」へとつながっていく。(SIAF ラボについての詳細は「SIAF ラボ年間記録集」を参照いただきたい)

また、SIAF2014 の開催中から、札幌市資料館内に集まるボランティアの人々を中心に「アートカフェ」は、毎回テーマを設ける人を「店長」とし、専門家のみならずさまざまな人々が気軽にアートを語らう催しとなっていた。そして SIAF2014 終了後は、SIAF ラウンジを会場に継続的に行われるようになった。カフェを利用してきた方も当日気軽に参加することができ、こうしてアートに興味のある人同士の交流が SIAF ラウンジの中から生まれていったのである。

SIAF 事務局マネージャー 漆宗博



創始期
“ラウンジ誕生”

注：ユネスコ創造都市ネットワークの登録分野の一つで、デジタル技術などを用いた新しい文化的、クリエイティブ産業の発展を目指す都市。札幌市は 2013 年 11 月に、世界で 2 番目の「メディアアーツ都市」としてネットワークへの加盟が認定された。



メディアアーツ都市(注)に認定されたことのシンボルイベントとして始まったものだった。都市を巨大な「メディア」としてとらえ、その中で市民が創造的に暮らすにはどうしたら良いかということに対し、積極的に取り組んでいくのが創造都市の理念であり、したがって、SIAF ラボ 1 年目の活動も特に「メディアアート」を軸とした新しいコンテンツの開発に焦点があてられた。ここから、ツララを「メディア」として捉えるとどんなことを見出せるのかを試す「BENTICLE PROJECT - TULALA (愛称ツララボ)」が立ち上げられ、後に、札幌市資料館を舞台とする「さっぽろ垂水(たるひ)まつり」へとつながっていく。(SIAF ラボについての詳細は「SIAF ラボ年間記録集」を参照いただきたい)



ツララの季節だけの特別なクッキー

2016年冬から、札幌市資料館を会場にして「ツララ」にまつわるイベントが開催されています。ツララのかたちをしたクッキーは、一昨年の同イベント期間に合わせてSIAFラウンジのカフェメニューに登場。当時、ちいさなりやカーで行商をしていた焼菓子屋の「ガブリ」さんに、味やかたちづくりをお願いしました。カップのふちにかけられるかわいらしいデザインや、ホットドリンクの温度にとけない独自のアイシングが実現して、お客さんは写真撮影などもたのしんでいたご様子でした。「そういう子どもころってツララ食べたなあ」そんなことを思いだすカフェ時間だったかもしれませぬ。



植物図鑑 01

【あじさいズ】



カフェテーブルや本棚の上、窓際などにひっそり飾られているアジサイたち。資料館の前にある綺麗なアジサイの花壇から摘んできたお花なんです。梅雨の季節には色とりどりに咲く花たちを、寒い時期にはドライフラワーとして楽しめます。季節ごとに色々な表情を見せてくれるかわいい子たち。皆様のご来室をいつでもお待ちしております。

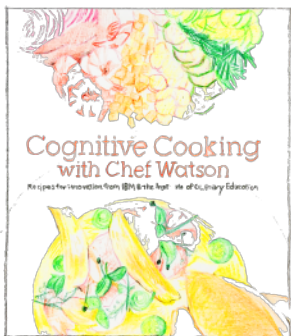


ラウンジのほんだな

第3回テーマ『ラボの日の本』

SIAF LAB.

2015年のSIAFラウンジのオープンと同時に、さまざまなプロジェクトもまたスタートしました。今回は、1年目に行われたプロジェクトの参考書籍として配架された本の中から2冊をご紹介します。まず1冊目は、「Cognitive Cooking with Chef Watson」。“シェフと一緒に料理する”、なんて当たり前のことかと思うかもしれませんが、なんとこのシェフ・ワトソンは人間ではなくコンピュータ。当時プロの人間シェフが作った9000以上のレシピとその評価、成分などのデータを蓄積し、そこから思いも寄らない素材や調理方法によるレシピを提示してくれるというもの。そんなシェフ・ワトソンによるレシピの数々が収められた1冊です。洋書ではありますが、こちらを参照に「コンピュータが提案した料理」、一度試してはいかがでしょうか？ 2冊目は「Raspberry Pi (ラズベリーパイ)をはじめよう」です。Raspberry Piは、海外のプログラミング教育の現場で実際に使われている低価格なコンピュータで、本書はその入門書にあたります。日本の小中学校でもプログラミング教育がはじまろうとしています。芸術分野でもコンピュータを活用する機会は増えつつあり、札幌国際芸術祭でも、プログラミングを制作過程に用いた作品が数多く出展されています。作品に実践から触れてもらう機会として、2015年は大人子ども問わずプログラミングに触れられる機会が設けられ、それに付随してこの本も活躍してきました。ぜひ本書を片手に、手のひらサイズのコンピュータを作ってみては。



左：Stephen Baker, Stephen Hamm, Penne Rossini 編「Cognitive Cooking with Chef Watson」(IBM Corporation, Institute of Culinary Education)
右：マット・リチャードソン、ジェーン・ウォレス 著 船田巧 訳「Raspberry Piをはじめよう」(オライリー・ジャパン)

SIAF ラウンジとわたし。

札幌市資料館
館長 坂本晴夫

資料館を訪れる方から「コーヒーでも飲みながらゆっくりできるところは無いの？」との問い合わせが多くありましたが、2014年の国際芸術祭開催を機にSIAFラウンジが生まれ多くの方から喜ばれて、施設運営に携わるものとして大変うれしく思います。特に観光客の方が各施設見学後、大通公園を散策し西端にある資料館に到着した頃には、足腰も疲れ気味でホッと一息できる場所として利用されています。お客様の中には、会話される人いろいろなお客様がいらっしゃいますが、中にはさっぽろ文庫を読書されコピーを依頼するお客様もあり、満足して利用されているのではないかと思います。従前同様、笑顔であたたかい気持ちでお客様を迎えていただき感謝しています。スタッフの皆さんありがとう！

